

平成 28 年度 大学院共通科目「国際研究プロジェクト」公開報告書

人文社会科学部 文芸・言語専攻

応用言語学領域 1 年 田村彩乃

1. 課題名

ポーランドにおける音声教育の実態調査及びポーランド人学習者の日本語音声データ収集

2. 背景

近年の日本語教育学研究では、「コミュニケーション」に役立つための日本語教育をしていこうと提案しているものが多く見受けられる。音声を経典とするコミュニケーションの中で、音声がどのような役割を果たしているのかといった研究にも注目が置かれるようになった。音声研究は、日本語学習者の発音がなぜ伝わらないのか、また、発音によって誤解が生じてしまうことを理解する一助となっている（戸田 2008：4）。基礎研究から実践研究、また、教材開発などが進んでいるが、対象者は、英語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者などの研究が多く、他の言語母語話者にはまだ研究の余地がある。

3. 目的

そこで本プロジェクトでは、ポーランド語母語話者に焦点を当て、学習者の日本語音声を分析するために音声データの収集を行うこととポーランドで日本語教育を実施している大学及び日本語学校を訪問し、音声教育の現状を調査することを目的とする。

4. 実施内容

- ・ 期間：2017 年 2 月 11 日～25 日の 2 週間
- ・ 訪問機関：日本語教育を実施している大学（高等教育機関）3 校と日本語学校 1 校
- ・ 調査項目：(1) 教師に対するインタビュー
 - 各教育機関における音声教育の現状調査
 - 教師の音声教育への意識調査
- (2) 日本語学習者の音声録音データの収集
- ・ 対象者：教師 5 名（日本人教師 4 名、ポーランド人教師 1 名）
ポーランド人日本語学習者 31 名



5. 成果

今までに、ポーランド語母語話者に焦点を当てた音声研究が管見の限りなかったため、ポーランドに行き、現地での実態調査は行えたことが一番の成果である。ポーランドへの渡航

は簡単ではないため、大学院共通科目「国際研究プロジェクト」を活用することで、現地を赴かなければ収集困難な多くの学習者の日本語音声データ収集や各教育機関への調査などを行うことができた。これが第一の成果とすることができる。

資料1 ポーランドの日本語教育機関調査

番号	教育機関	学生数	教員数 (日本人)	日本語の位置け及び教育目的	カリキュラム全体		主教材
					全体	音声教育	
1	A大学	104	13(5)	日本研究を行うために必要な日本語能力の習得	各学年別のコース (日本研究+日本語演習)	言語学理論の音声学 文法授業の一部 会話・聴解	『初級日本語』(東京外国語大学) 『中級日本語』(東京外国語大学)
2	B大学	121	12(4)	日本研究を行うために必要な日本語能力の習得	各学年別のコース (日本研究+日本語演習)	言語学理論の音声学 シャドーイング 会話・聴解 弁論大会	『初級日本語』(東京外国語大学) 『ニューアプローチ』中級・中上級 (語文研究社)
3	C大学	120	16(3)	日本研究を行うために必要な日本語能力の習得	各学年別のコース (日本研究+日本語演習)	言語学理論の音声学 会話・聴解 音読・シャドーイング	『初級日本語』(東京外国語大学) 『中級日本語』(東京外国語大学)
4	D日本語学校	160	5(2)	言語教育としての日本語 実用日本語	習得レベル別クラス (1年で1冊の教科書)	会話・聴解 弁論大会	習得レベル(CEFR)に対応した独自教材

今回の調査で、ポーランドで訪問した各教育機関で実施されている日本語教育のうち、「話す」「聞く」の技能における音声教育は、「会話」と「聴解」の授業が中心に行われており、その他には、シャドーイングや弁論大会の指導、言語学における音声学の理論として授業に組み込まれていた。しかし、学習者のアクセントやイントネーションの習得実態を考えると、それらに充てられている時間は十分ではない。その背景には、発音を個々に対応しながら逐一訂正する十分な時間を確保することが難しいことや、ポーランド人が母語とするポーランド語の正の転移によって日本語の音に困難点が少ないという考えがあることから、各教育機関の教師たちの意識には音声教育の中での発音の指導の優先度が低いということが分かった。また、そのような環境で指導を受ける学習者たちにおいても発音への意識が薄いことも分かった。さらに、この影響が、実際の学習者の音声に現れるのかは今後の分析次第ではあるが、フォローアップインタビューで得た学習者のコメントから、学習した知識との関係に影響が見られるのではないかと考えられる。現段階で、各教育機関の音声教育の実態と、学習者の音声データの両者を得られたことに成果があると期待できる。

<参考文献>

戸田貴子(2008)「日本語音声の研究と教育における課題」『日本語教育と音声』pp. 3-21、くろしお出版。